

巻 頭 言

東日本大震災と生物学的精神医学会

武田雅俊 日本精神神経学会理事

Masatoshi Takeda

3月11日の東日本大震災は、マグニチュード9.0というこの100年間で世界4番目の巨大地震であった。東日本太平洋岸一帯に押し寄せた津波に加えて、福島第一原発事故が重なり、死者15,391人、行方不明者9,171人、避難者93,379人を数える(平成23年6月8日現在)未曾有の大災害となった。世界・国内から数多くの救援チームが派遣され、被災地の方々への支援活動がなされてきたが、本学会でも早くから東日本大震災対策本部が立ちあげられ、支援体制が整えられた。大震災から3カ月が経過しようとしている現在、今後の心のケアの重要性が指摘されており、精神科医およびメンタルヘルス専門家の支援活動が期待されている。大震災で亡くなられた多くの方のご冥福をお祈りすると共に、1日も早い被災された方々の生活の立て直しと被災地の復旧・復興とを祈念している。

思い返すと16年前の阪神淡路大震災(平成7年1月17日)はマグニチュード7.3の都市直下型地震であり、死者6,434名に加えて約31万人が避難を余儀なくされた。筆者自身も震災を経験し被災地での支援活動に参加したが、この折の経験は、精神誌97巻に「阪神・淡路大震災における支援活動資料集」として記録されている。この資料集は、当時の大阪医科大学精神医学教授堺俊明先生が中心となりまとめられたものであるが、おりしも本年4月に堺俊明先生は鬼籍に入られた。

東日本大震災の影響で多くの学会や集会が中止あるいは延期された。東京で予定されていた4年ごとの医学会総会も実質的には中止となった。5月に予定されていた第107回本学会学術集会も本年10月に延期されたが、5月21日の午前中に「東北関東大震災に対する心のケア支援と復興支援対策ワークショップ」が、午後に総会が開催された。ワークショップでは、前半で、被災地からの経過と課題について岩手県、宮城県、福島県からの報告と本学会の取り組みの報告がなされ、「大規模災害時のこころの支援—自然災害と放射線事故(金吉晴先生)」、「復興のなかでの精神科医の役割(朝田隆先生)」の基調講演があり、その後、「こころのケアの今後の課題と復興支援」と題して、災害精神保健の国際的動向と日本の経験(鈴木友理子先生)、子どものこころのケア—日本児童青年精神医学会の活動を中心に—(山崎透先生)、復興期の精神保健活動—

阪神淡路大震災の経験から—(加藤寛先生)、中越での2つの大震災の経験と復興支援(染矢俊幸先生)の講演があった。最後に、鹿島晴雄理事長から「日本精神神経学会理事会声明」の発表があり、東京お台場に参集した1,200名以上の会員にとって有意義な集会となった。

一方、同時期に予定されていた第33回日本生物学的精神医学会は、急遽震災関連のプログラムを組み直して、5月21~22日に予定通り開催された。日本精神神経学会が本年の学会延期の可能性を検討している中で、生物学的精神医学会が予定通りに学会を開催するかどうかについて生物学的精神医学会理事会で大いに議論され、被災地の会員には特段の配慮がなされるべき、今の時期は被災地支援に力を注ぐべき、日本全体の活動が萎縮してしまうのはよくない、生物精神学会は日本精神神経学会ほど規模は大きくない、など賛否両論の意見があったが、様々な議論の末に開催が決定された。震災関連プログラムは福島県立医大丹羽真一教授による「東日本大震災後のこころのケア—大震災と原発事故のもとでの経験—」と、岐阜大学塩入俊樹教授による「震災時のこころのケア—新潟県中越地震での経験を踏まえて—」であった。震災の凄まじさとその被害の甚大さをご報告いただくと共に、震災後の心のケアの重要性を指摘していただき、有意義な内容であった。

5月29日から6月2日にかけて、チェコ共和国プラハにおいて第10回世界生物学的精神医学会が開催された。小生も2年後の世界大会を主催する日本生物学的精神医学会の理事長としての役目があり参加した。フローレンス・チボー理事長の発案により、開会式の冒頭に東日本大震災の犠牲者に対して黙禱をささげた。日本からは過去最多の117名の参加者があった。在プラハ日本大使館で開催したジャパンナイトでは、大使のご挨拶の中で、未曾有の大震災に対する各国からの支援に対する感謝と共に、「日本は力強く復興への道を辿り始めたところであり、日本全体の活動が萎縮することなく行われることが望ましいと考えており、これからも日本の活動を温かく見守ってほしい」と述べられた。これは2013年6月23~27日に京都国際会館で第11回世界生物学的精神医学会をお世話することになっている日本生物学的精神医学会にとっても力強いメッセージであった。